

土が現れ、特に北半で密集した柱穴・土坑が検出された。深度のあるしっかりした柱穴がかなり存することから、ここで想定した以外にも多くの建物跡が存在したものと思われるが、調査範囲の関係ですべての把握はできていない。調査面積は約110㎡。

掘立柱建物跡

柱筋が必ずしも揃わず、かつ柱穴の深度にもばらつきがあるが2×4間、北面に庇が付く建物を想定した。梁行は地形的な制約から2間が限界であり、桁行についても遺構が疎となることからほぼ間違いないと考えている。深さ数cmに満たないものであるが、南辺から4mの位置に平行に走る小溝が存在することも傍証となろう。梁行の柱間は2.1m、桁行は約2mで設計されたようで、舎屋の規模は4.2×8mとなる。

内部に位置する1号土坑との関係は定かでないが、土坑がほぼ中央に位置する点が意味をもつのかも知れない。

出土遺物

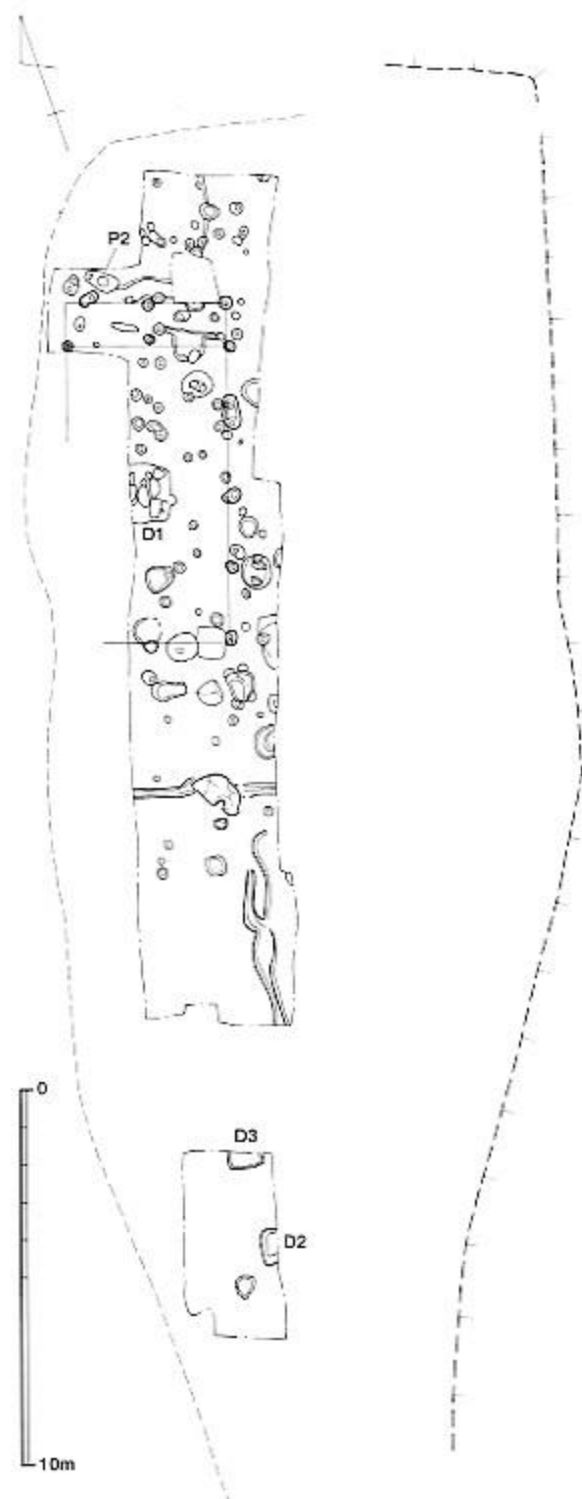
庇を想定するP1から土器片が出土するが、時期を判断できるものではない。

1号土坑（図版10、第18図）

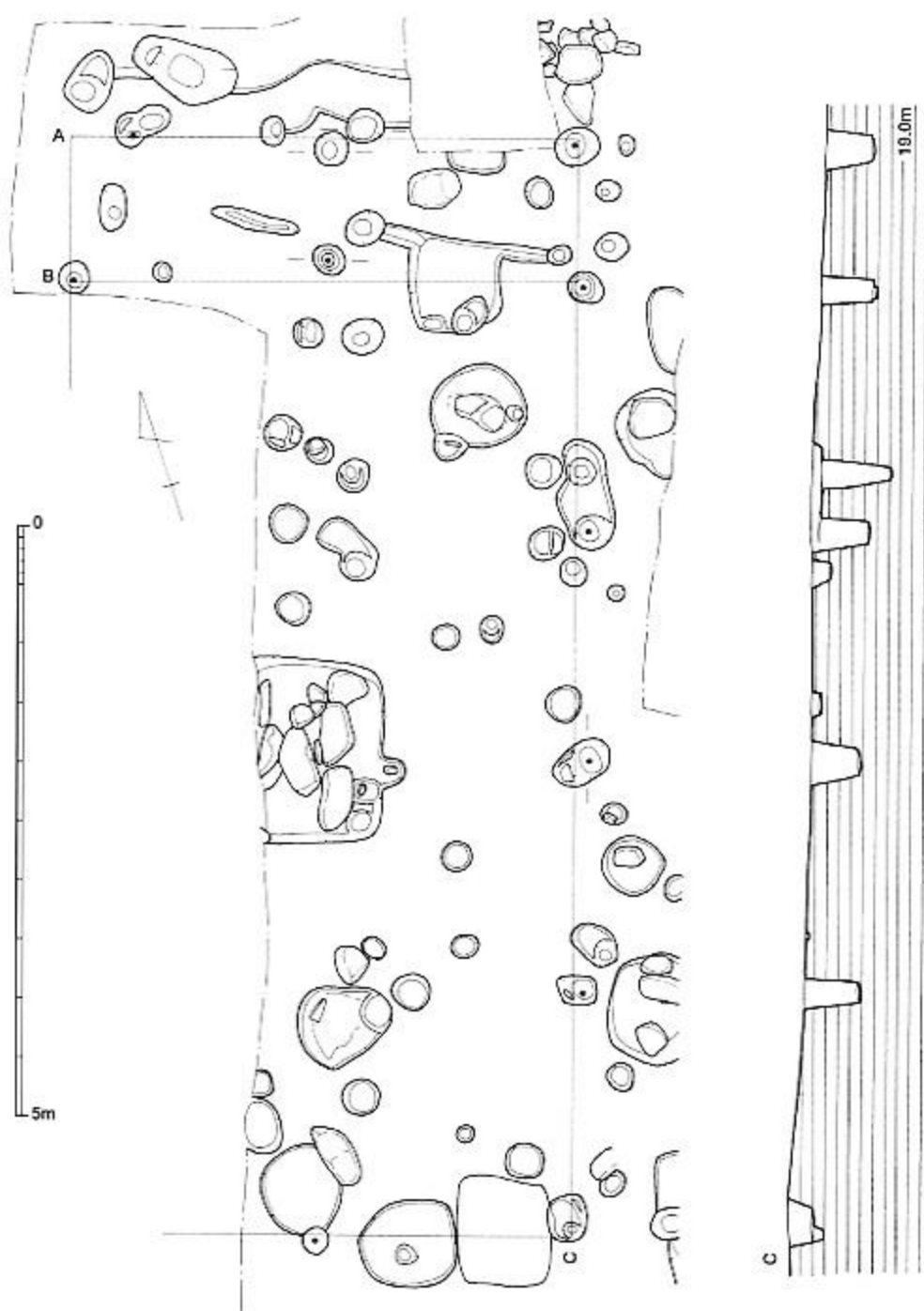
先述したように掘立柱建物跡の中央付近に位置する。内部に石塔を含む大小の礫があるが、大型の礫は石塔を挟んで平行に並べられたような様子を呈する。それは石塔以外の礫が焼けて赤くあるいは煤けて黒く変色していることから推測されるが、接地面が煤けた礫もあり、必ずしもすべてが原位置を保っているとはいえないようである。

検出した規模は東西長約1.1m以上、南北長1.6mの規模で、深さは0.2mに満たない。埋土に粘土が顕著であるが、炭や焼土は見えなかった。

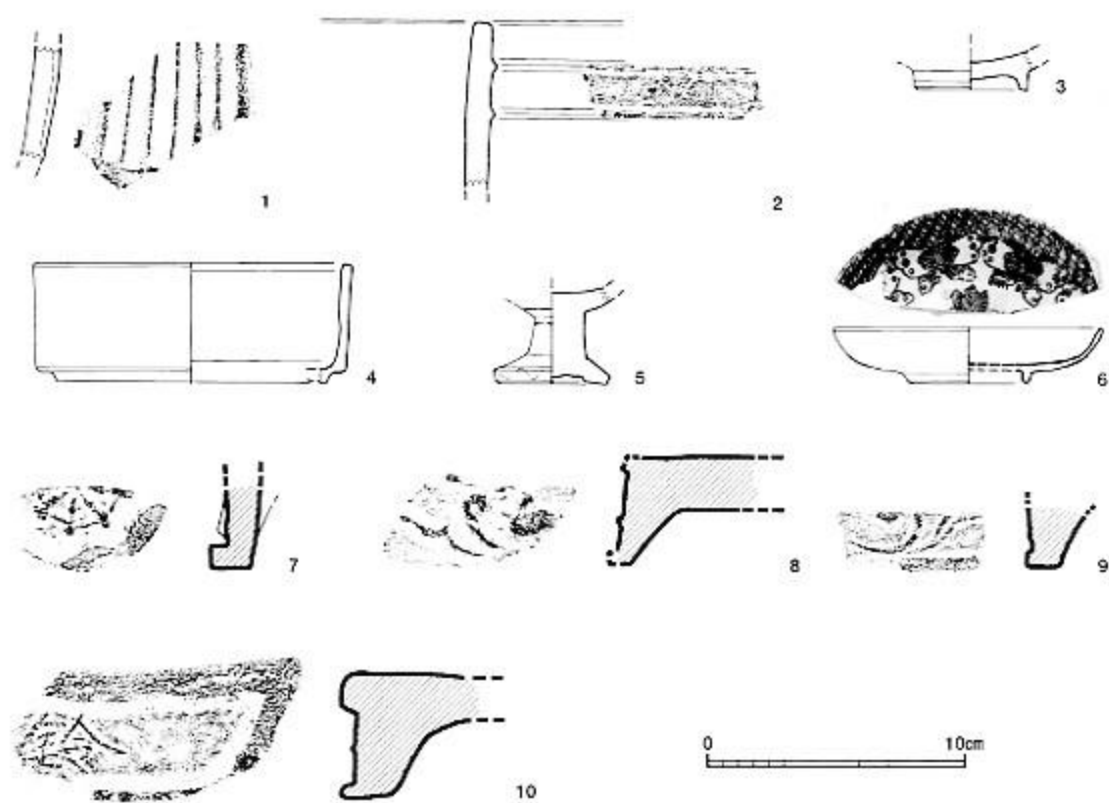
出土遺物



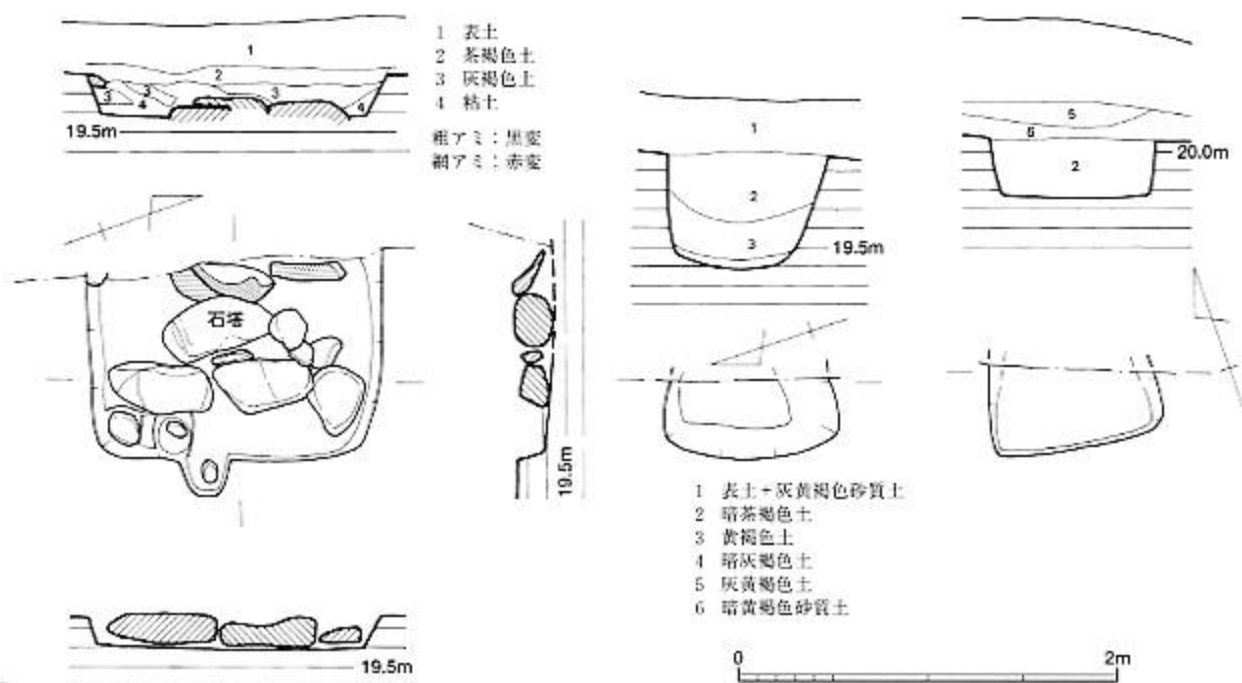
第15図 第5地点遺構配置図（1/200）



第16图 第5地点掘立柱建物跡実測图 (1/60)



第17图 第5地点出土造物实测图 (1/3)



第18图 第5地点土坑实测图 (1/40)

土師器 (第19図1~3)

1は摺鉢口縁の小片であろう。口端部内側を巻き込むように造る。器肉が灰赤褐色、器表は灰褐色となる。2も摺鉢の残片。口縁部を小さく肥厚させ、端部に面を造る。器肉は灰黄褐色、器表は灰褐色となる。3は口縁部が小さく外折する鍋の小片。調整痕はよく見えないが、体部外面は指撫でを多用するようである。器肉および体部内面が灰黄褐色、口縁部内面から外面にかけては灰黒色に近い。

瓦器 (第19図4)

器高8.5cmほどの浅い火鉢の小片で、口径は判らない。口縁部は外方へ小さくつまむだけで、変化が乏しい。端部も丸くおさめられる。体部内面は篋磨きのようにみえるが明確でない。体部外面は下半に篋削りの痕跡がみえ、それ以上では指頭痕のような浅い凹凸が微かにみえる。器肉が暗灰色~灰褐色、器表が灰黒色~灰褐色に発色する。

石塔 (図版12、第21図1)

土坑中央部に横倒しとなっていた石塔で、器表が脆くなった安山岩製。頂部は方錐形に整形するが、底部はほぼ自然石のままで、加工していないようである。また、頂部下の2条の刻線は不整で、シャープさを欠く。左に図示した面が正面と思われ、ほぼ平坦な面をなすが、背面は小さく蒲鉾状に膨らむ。梵字等の線刻は見られない。全長約60cm、最大幅約26cm、奥行約21cmを測り、一人で運ぶにはとても困難な重量である。

2号土坑 (図版10、第18図)

南調査区でその一部を検出した。このグリッドではこれらの2基の土坑以外はまったく遺構が存在しない。平面形は方形と思われ、東西長0.4m以上、南北長1m弱、深さ0.3mほどの浅いものである。埋土には一様に硬い暗茶褐色土が堆積していた。

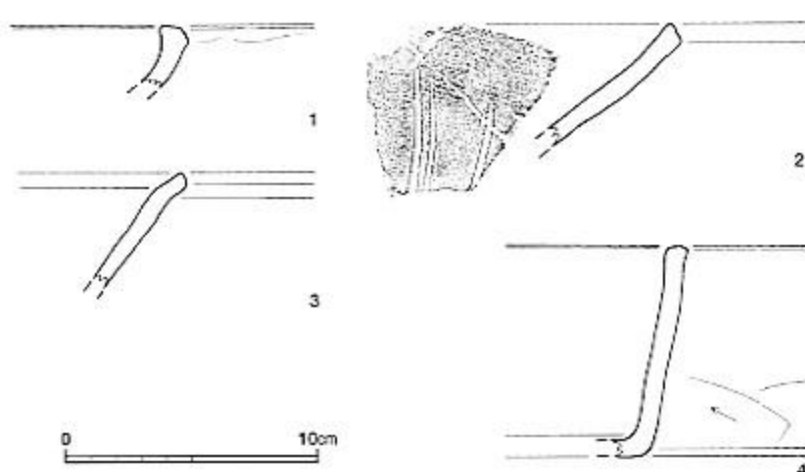
出土遺物はまったくない。

3号土坑 (図版10、第18図)

2号土坑の北に近接して検出した。これも平面形は方形を呈するようで、東西長0.9m、南北長0.4m以上、深さは0.6mが残存する。床面を薄く暗灰色粘土が覆い、上方に黄褐色土・暗茶褐色土が順に堆積する。これも出土遺物はない。

P2

掘立柱建物跡北西に位置する土坑状の遺構。長軸0.9m、短軸0.5m、深さ0.3mの規模である。埋土に特記するような状況は見られなかった。



第19図 第5地点土坑出土遺物実測図 (1/3)

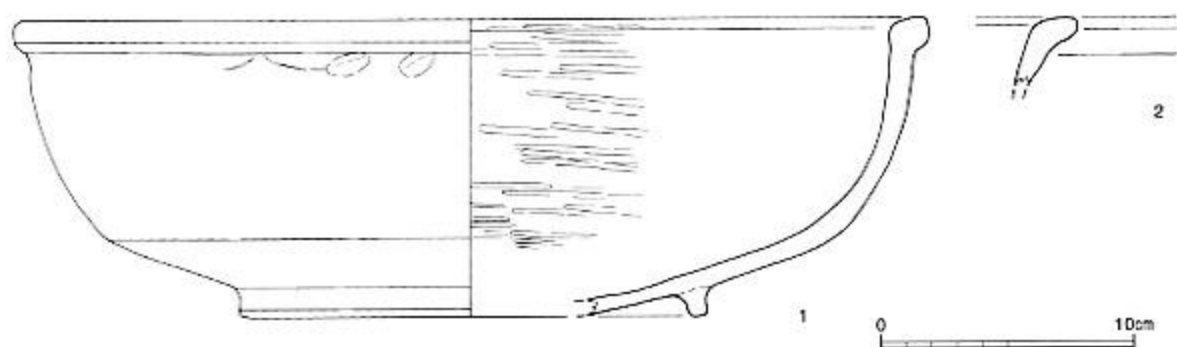
出土遺物

土師器 (第20図2)

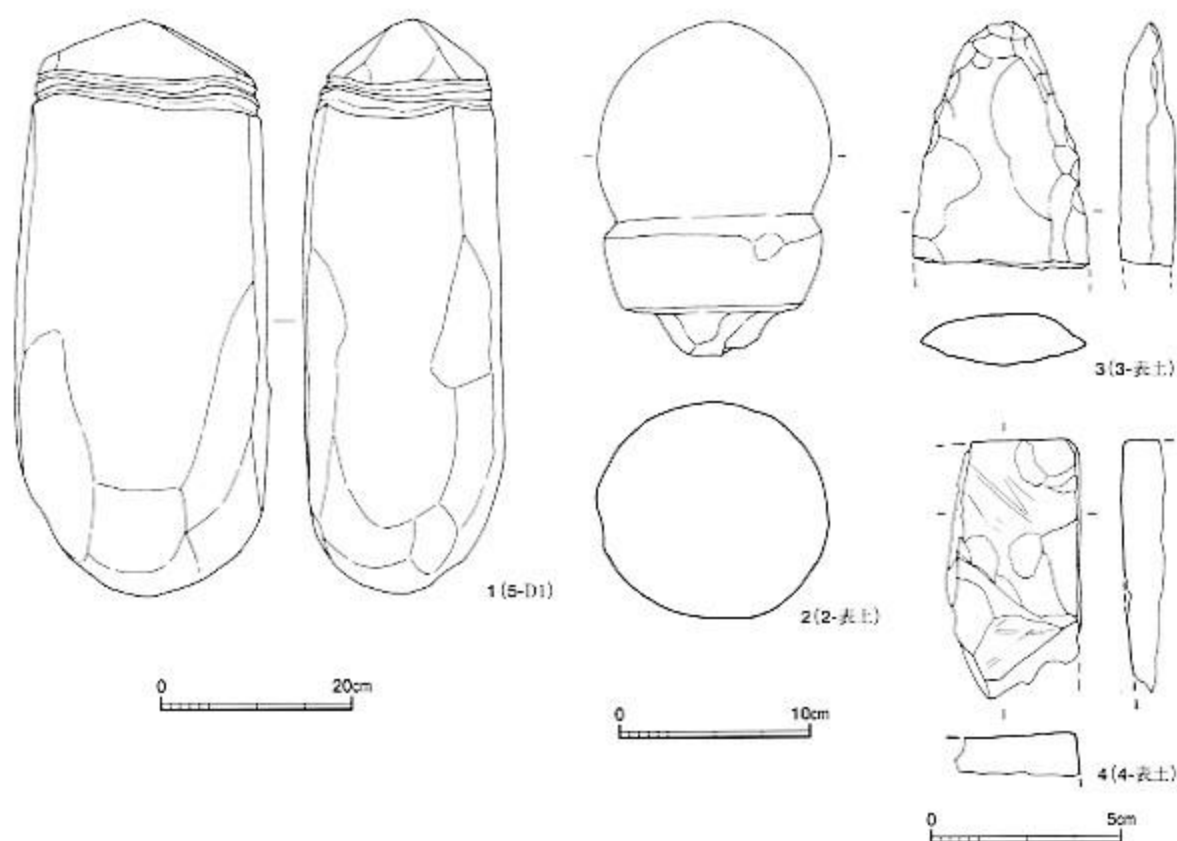
鍋の小片。口縁部を外反させるが、外面の屈曲部、内面の稜線は比較的明瞭である。器肉中心部は灰黒色となるが、表層は明黄褐色となる。器表は非常に荒れている。

瓦器 (図版12、第20図1)

口縁部はほぼ1/4が残存するが、それ以外の部分は小片となる。体部は下位に比較的明瞭な腰をもち、



第20図 第5地点P2 出土遺物実測図 (1/3)



第21図 出土石製品実測図 (1/8・1/4・1/2)

内彎しつつ立ち上がる。口縁部外面は玉縁状に肥厚させる。内定面は非常によく使用されたようですり減っていて、器表も非常に荒れているが部分的に艶磨きが観察でき、本来は全体に施していたようである。ただし、高台内では確認できない。器肉・器表ともに明灰褐色を呈し、変色部はない。

包含層出土の遺物

瓦器（第17図1・2）

いずれも火舎の残片。1は天地不明であるが、断面三角形の平行突帯を縦方向に8条以上付し、下位は小さな突帯で界線とする。器肉は灰黄色に近いが、外面は灰黒色、内面は黒色化が弱く、暗灰色となる。調整痕はみえない。2は同じく口縁部小片。ほぼ直立して口縁部が水平な面となるが、磨滅してシャープさを欠く。口縁部下に断面円形に近い小振りの突帯2条をめぐらせて文様帯とし、繊細な描線の方形を2個単位で付す。これは非常な火熱を受けたようで、器表が荒れるとともに、大部分が黄白色～灰赤褐色に変色する。

陶器（第17図3）

碗の底部片で、高台部は完周する。高台は削り出したようで、外面中位でさらに削り込まれる。素地は暗灰色緻密で、釉は淡灰緑色透明である。なお、施釉は高台畳付を除いて全面におよぶ。

染付（図版12、第17図4～6）

4は段重の小片。胎土は純白で、釉も乳白色透明である。体部外面に鮮やかな空色に発色する竹垣とそれに絡まる大輪の花を配するが、施文は型紙摺であろう。高断面と同部下端、および高台外面～体部下端の屈曲部付近は釉を掻き取っているが、それ以外は高台畳付を含めて施有する。5は仏飯器。基本的に脚端面から底部にかけての釉を掻き取っている。釉は白濁し、施文する圏線は暗灰青色となる。なお、上面に窯道具痕が残る。6は皿で、高台畳付以外はすべてに施釉する。文様はコバルトブルーに発色し、地は乳白色透明釉を施す。文様はこれも印版で、体部内面に複線の網目文（竹垣か?）、その下位に蝶を廃し、見込み中央に葉の一部がみえる。これも窯道具痕がある。

瓦（図版12、第17図7～10）

7は復原径6～7cmの小型品。瓦頭の下半が残存し、背面では剥離面のラインがほぼ直角を描くとともに、その頂点が中心をずれていることから棧瓦に付されたものと思われる。瓦頭には宝輪を表す。胎土・焼成・色調などは現代瓦に共通する。8は唐草文軒平瓦で、中心飾りが残存し、上下の縁が一部残る。調整痕は顎下で撫でが施されるほかは明瞭でない。胎土には大粒の砂粒を含まず暗灰色を呈し、表面のみ灰黒色となる。9はやはり軒平瓦で、8に比して繊細な唐草文が刻出される。これも表面が荒れるが、器肉が灰黒色、器表が灰黄色層となっている。10は「鈴」字が付された軒平瓦で、縁が高く突出する。胎土粗く、器表が荒れ、破面の状況は先の9に似る。

小 結

調査開始以来初めて本格的な遺構に遭遇した地点であった。

掘立柱建物跡の時期は不明である。D1とする土坑と重複するが、建物跡が東柱をもたない構造であり、土坑が位置的に建物中央に近い西端に位置することから土坑との同時性も想定できる。

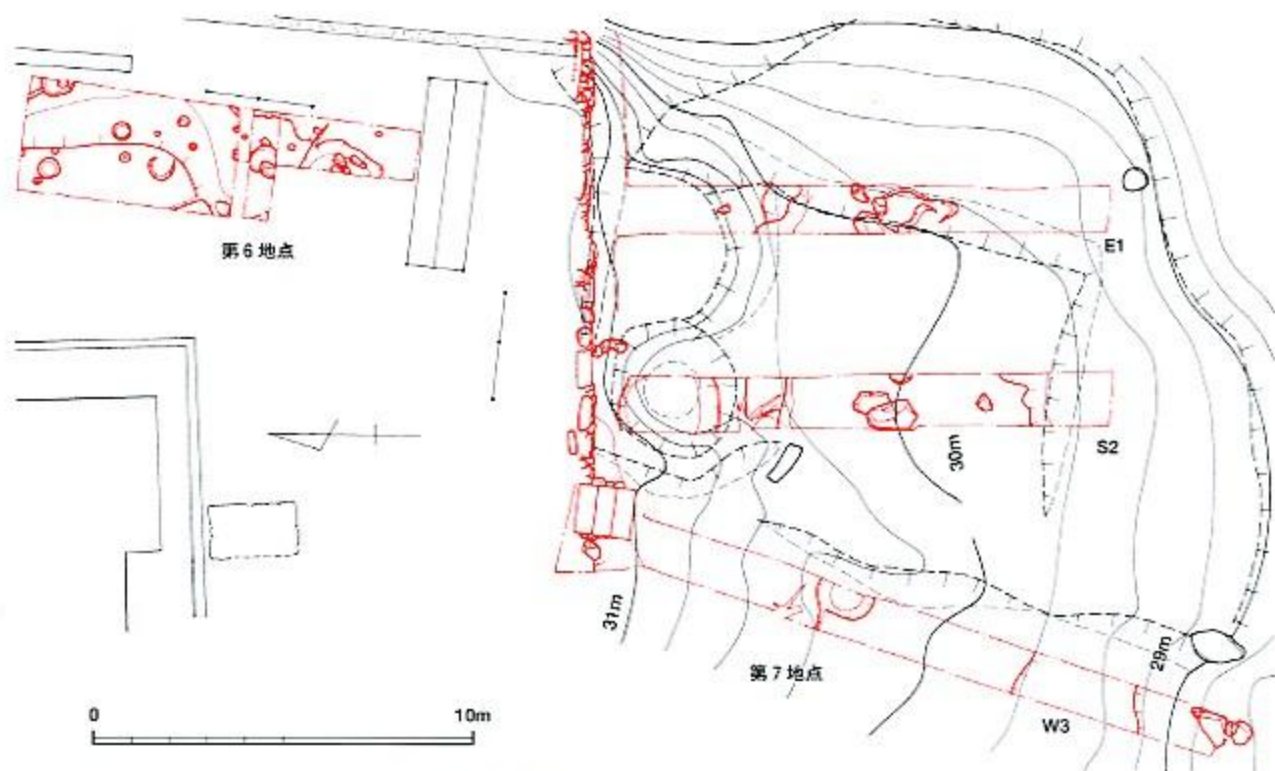
D1出土土器はいずれも小片であるが、摺鉢は14世紀代のものと思われる。ほかの遺物については良好な類似資料が管見に触れなかつたが、出土遺物が小片であることから混入である可能性も否定できない。ただ、ここでは火にかけられた石塔の存在が気になる。この山中には鎌倉初期に製作されたと考えられている薬師如来像が存在し、時期の特定が困難であるが五輪塔も散在する。また、近世以降は確実に信仰の山であった。寺院が古代から存続するのであれば石塔を火にかけようとする行動は通常では考えられず、キリシタン大名の大友宗麟に焼き討ちされたという伝承との関連が予想されよう。しかし、その年代は16世紀末葉のことであり、出土遺物の年代感とは相容れないものである。この京築地方での神社仏閣はほとんどがその衰退期を大友宗麟によるものとしており、本寺もその一例であろうか。

P1出土の瓦質鉢の類品は、大分県宇佐市高森城跡（瓦質火舎、外面削りか、室町初頭とされるが、同じ地点から16世紀代の白磁も出土）、同玖珠郡玖珠町伐株山城（瓦質火鉢、外面削り、16世紀中頃）などで出土している。調整などで異なる部分もあるが、本例も16世紀代に比定して大過ないであろう。（飛野博文）

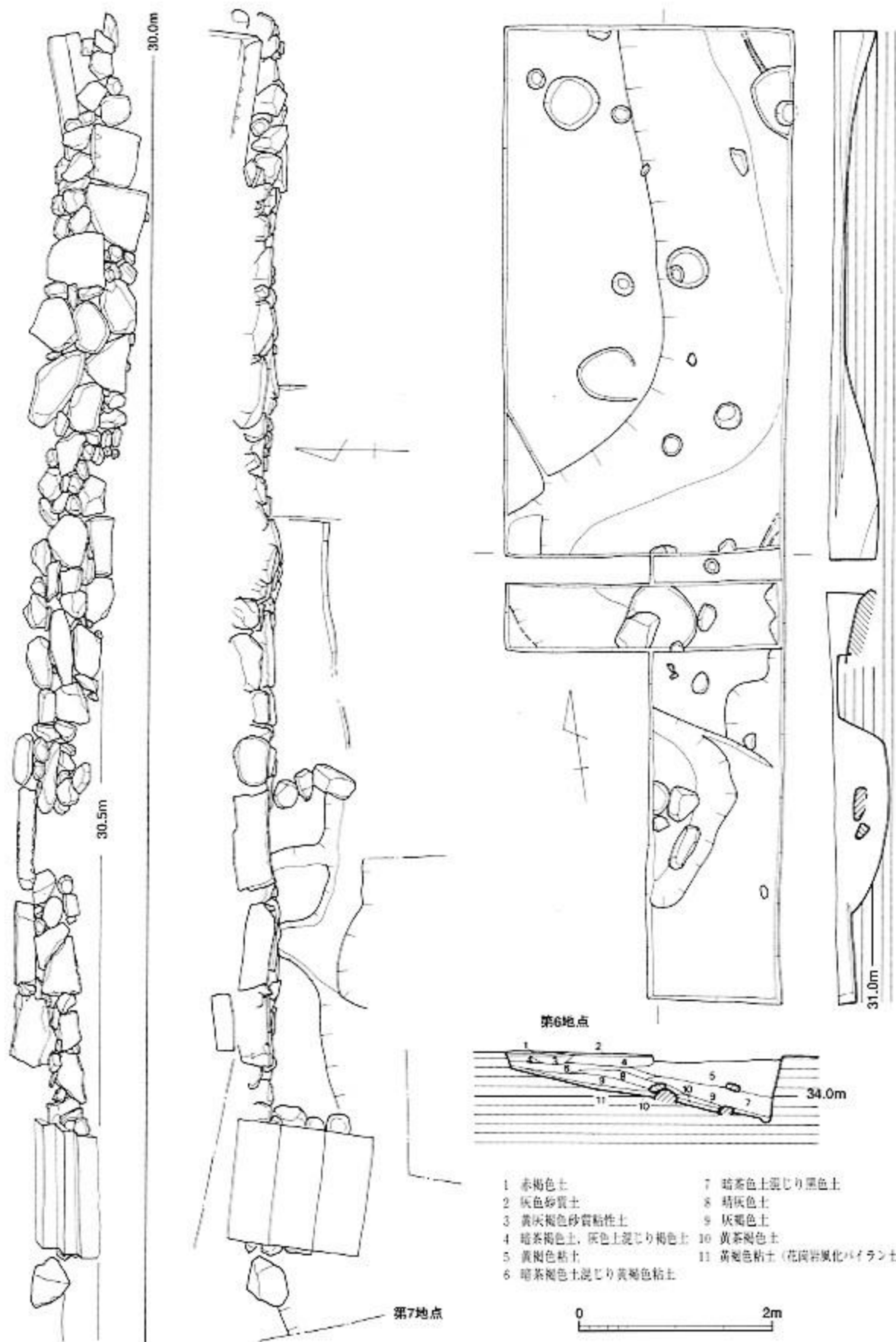
6) 第6地点

第6地点は、既存遊具（滑り台）の建替予定地を調査した。社殿前の平坦面であり、標高31.40m前後に整地されているが、社殿での祭典時の広場確保と既存の滑り台や鉄棒を避けた部分にトレンチと排土置場を確保する必要があるため、既存遊具に接した部分にトレンチを設定した。

トレンチの表土を10cmほど掘り下げた部分には黄褐色の花崗岩パイラン土の地山と黄褐色粘土で整地された部分で平坦面を確認でき、この面を切り込む柱穴状ピットなどが確認された。



第22図 第6・7地点地形測量図 (1/200)



第23図 第6・7地点遺構実測図 (1/60)

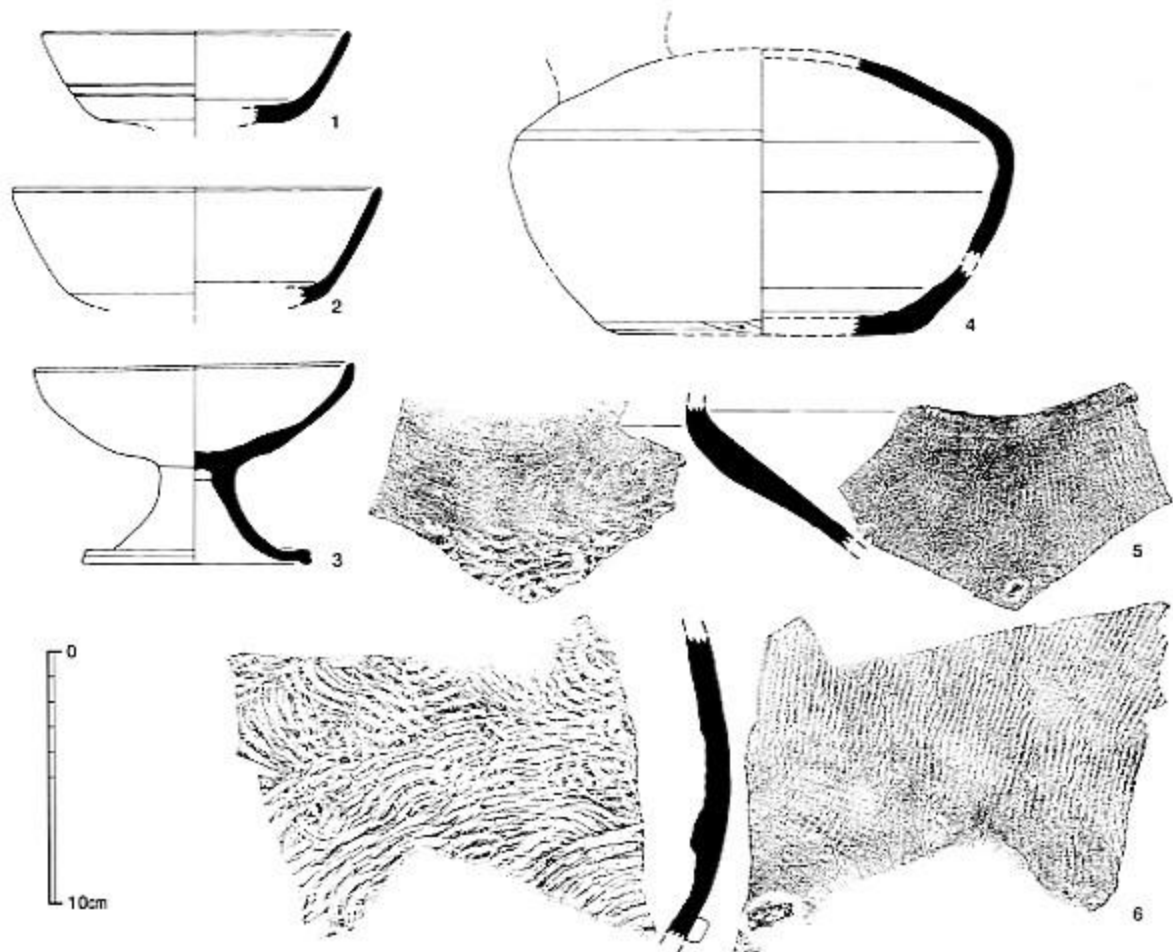
大きめの柱穴状ピットは、直径50～60cm、深さ15cm程の大きさ。南端のピットは直径2.0m前後、深さ40～50cmの土坑と重なって不明だが、土坑内には花崗岩塊石や近世瓦片・焼土塊を含む。南北方向に2.5～2.8m間隔で並び、北側で直交する2.2m東側の位置にも深さ15cmほどの柱穴状ピットがあり、直径25cm、深さ30cmのさらに深い小ピットが内側にある。南北方向のピット列は主軸方向N8°W方向を向き、建物が何らかの構築物の痕跡かも知れない。

トレンチの東側半分や南側にみられた黄褐色粘土の整地面を除去した下層には暗黄褐色土が堆積し、須恵器片などの遺物を含むが、暗黄褐色土下面は東側や南側に傾斜し、堆積土層確認ベルト部分で深さ0.6m規模の溝状落込みになり、下部の黒色土部分に須恵器片がややまとまって出土した。溝状部分の床面は幅0.8～1.2mで緩やかな傾斜をなすが、階段などの施設はみられない。トレンチ東半部の地山面の形状などを考え併せてみれば、後期古墳の墳丘裾部で、上部は削平されたものの裾部のみが残った可能性が高い。

出土土器 (図版 14-4、第24図)

須恵器 (1～6)

1～3の高杯のうち1・2は杯部破片で、2はやや深い形状をなすが、平らな杯底部から口縁部は直線的に開いて立ち上る。1は復原口径12.2cm、杯部高3.7cmの大きさで、下半部の外面に細かい沈線が2条巡る。淡灰色に焼成され、内面に灰かぶりの自然釉が付着する。2は復原口径14.6cm、杯



第24図 第6地点出土遺物実測図 (1/3)

部高5.0cm前後の大きさ。3は口径12.8cm、器高8.0cm、裾部径9.1cmの大きさの高杯で、高さ4.0cmの杯部は内彎気味に開いて立ち上る。脚部は喇叭状に開き、脚裾部は鳥嘴状に屈折する。細砂粒を僅かに含む胎土で、淡灰色に堅く焼成される。

4は平瓶で口頸部と胴下部を一部失う。胴部最大径20.0cm、底径12.2cm、残存器高11.2cmの大きさに復原できる算盤玉形の体部で、天井部は蓋を貼り付ける擬口縁部分まで確認できる。内外面とも回転ナデ調整され、外底部は静止ヘラ削りで調整される。

5・6は甕で、5の肩部破片は外面を平行叩き痕の後に部分的に回転ナデで消し、内面には同心円当て具痕がみられる。6は胴部片で、外面は平行叩き、内面は同心円当て具痕がみられる。

小 結

出土遺物の須恵器からは6世紀後半頃の年代が与えられ、鈴熊山頂部の南東斜面に占地した古墳の存在が想定される。現在の広場は大半が削平で整形され、斜面端部は一部盛土で整地されたものである。この面では性格不明ながら近世の構築物の存在も想定可能である。

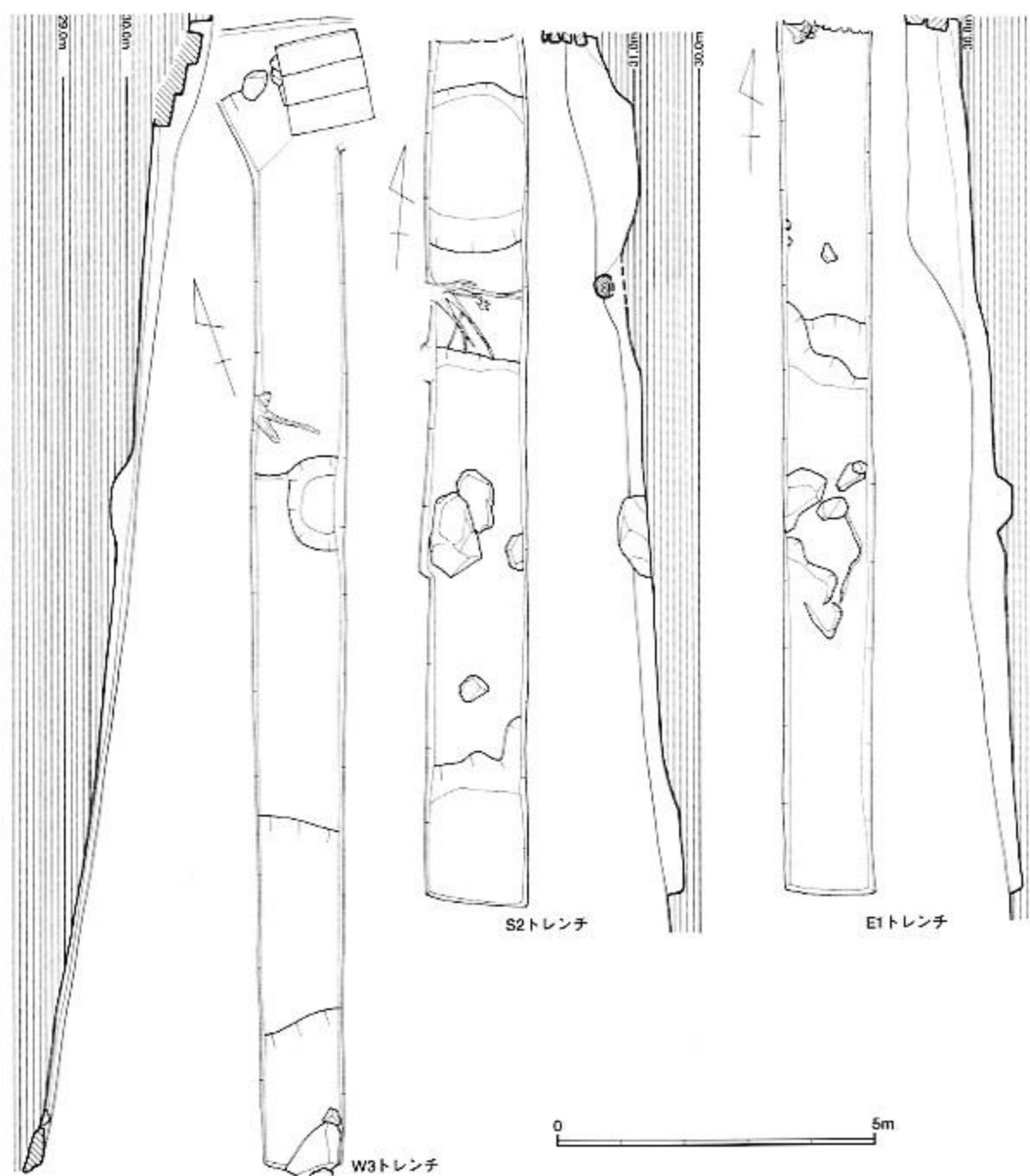
7) 第7地点

神社社殿前の平坦面である第6地点の南側に位置し、第6地点より一段下がった緩傾斜の平坦部で、展望広場を建設する予定地である。雑木と篠竹が繁茂し全く見通せない状況であったため、クスや桜の木を残して伐採する作業から始めた。300㎡弱の範囲を伐採したが、緩やかに南側へ傾斜する。ここでは傾斜に平行して3本のトレンチを設定し、表土などを除去し、掘り下げながら遺構の存在確認を進めた。すなわち、東側からE1トレンチ、S2トレンチ、W3トレンチである。E1トレンチは北側にある土饅頭状の膨らみを切開する位置に、長さ14.0m、幅1.5mの広さ。W3トレンチは園路部分に、長さ18.5m、幅1.5mの広さ。S2トレンチはその中間部に相当する位置に、長さ14.0m、幅1.5mの広さである。土饅頭状の膨らみは廃棄した瓦片などの塚であった。各トレンチでは10cm～30cm程の深さでやや硬い花崗岩の風化バイラン土の面に達するが、北端で埋没していた石垣遺構の存在を確認するほかには、明確な遺構は存在しなかった。このことは、この地点の大部分が削平によって形成された地形であることを明らかにさせる。

一方、北端に発見された石垣は、瓦類を投棄した塚状の地形で隠れていたもので、石垣全体を露呈させるために、各トレンチ北端を繋ぐ形で東西の長さ14.0m、幅1.0mのNトレンチを追加した。

E1トレンチでは、石垣の前面に二段の削り出しがみられ、低い面の中程には花崗岩風化礫の間を掘り込む不整形のピットが1ヶ所発見された。石垣前面の瓦塚の下からは陶磁器などが出土している。

S2トレンチでは、北端部の瓦塚の下は直径2.0m、深さ0.4～0.5m規模の土坑が掘り込まれていた。この土坑は、旧地表に近い部分から掘り込まれ、石垣前面の削り出しを切り込んでいて、底面は青灰色に変色している。また、二段目の削り出しの中間部には比較的大きな花崗岩石塊が露出して、礎石の可能性も考えられたが、東脇にもう一つの石が重なり、端部は風化礫となって地山との境が明確でない。周辺にも小さな石塊が散乱するが、これらの石が礎石を構成すると言えるだけの積極的な根拠を見出せなかった。



第25図 第7地点調査区実測図 (1/100)

W3 トレンチでは、北端部にコンクリート製の階段が現れ、埋没していたものの近年まで第6地点平坦面との通路に使われていたものと考えられる。階段は三段で、幅70~75cm、一段の高さ10cm前後、奥行き約25cmの大きさに形枠流し込みで造られ、前面側に傾斜するが石垣崩落石を巻込んでいる。階段の前面にはE1 トレンチやS2 トレンチにみられた一段目の削り出しに相当するやや平坦な面が続き、階段から約3mの位置で、二段目に移る段の下に直径70cm、深さ10~20

cm程の土坑が掘り込まれている。またトレンチ南端には地表面に露出していた花崗岩の石塊が裾を広げるものの、性格の判断はし難い。

Nトレンチでは、石垣の面がN90°の東西方向を向き、西端部にみられたコンクリート製階段の主軸は石垣直交軸に対して約6°前面が西側に振った向きとなっている。

石垣は東西方向に14.0mの長さ、高さ0.6~1.1mに積んだ状態で、南側に面を向けて発見された。50~60cm大の花崗岩の割石や川原石を中心に積まれるが、一部安山岩の川原石も混じる。積み方はやや雑で規則性はみられないが、二~三段積んで上面の高さを標高31.2~31.4mに揃えている。割石の幾つかには矢羽根楔痕が明瞭に残る。東端部は崩落したらしく、東側石垣上面に並べられたらしい隅の角棒状割石上に20cm角、長さ150cm程の角棒状割石を架けて高さを確保している状況がみられる。また、東端から8.5mの位置には3個の塊石列が前面側に伸び、その北西側に石積み of 抜ける部分がみられる。さらにこの塊石列の3.5m西側にも別の塊石列が伸びている。この塊石列は一段の基底部のみで両者の配置は八字形の平面形をなすことから階段施設のようなものがあった可能性もあるが、前面の攪乱土坑とも何らかの関連があるのかも知れない。

出土土器

染付(1~11)

1~7は碗で、8~11は皿である。1は古伊万里の小形くらわんか手の碗で、復原口径9.5cm、器高4.6cmの大きさ。外面に梅らしい意匠の絵が描かれ、外底高台内に意匠不明の文様が付される。淡灰色の胎で、濁白灰色の釉がかかる。2は伊万里の小形碗で、外面に花卉文様が描かれ、高台内外に平行線を巡らせる。白灰色の胎で、青みを帯びた白色の釉がかかる。3は伊万里の碗で、復原口径10.7cm、器高6.7cmの大きさ。外部が厚く、高台は低め。口縁部外面に圏線、体部外面に鳥と草らしい絵が描かれるものの、発色が悪い。灰茶褐色の胎で、釉は乳白色を呈する。

4~6は灰茶褐色の胎で、青みがかかった灰茶色の釉がかかるもの。5では復原口径10.5cm、器高6.4cmの大きさで、口縁端部が僅かに内彎する。

7は外反気味の高台をもつ碗で、体部が緩やかに内彎して開く模様。淡黄褐色の胎で、黄褐色の釉がかかる。

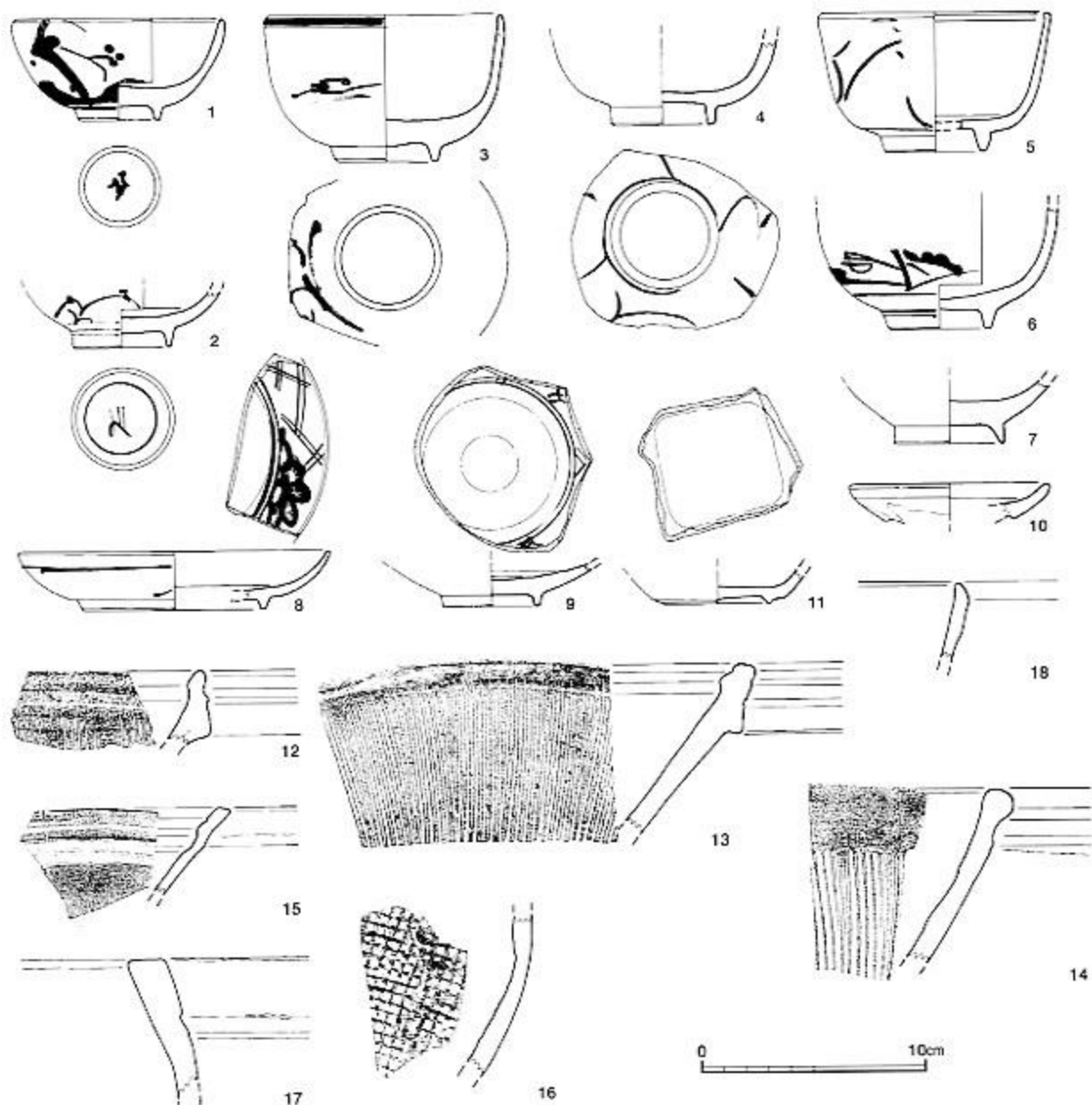
8・9は内底の釉を蛇の目に掻き取る皿で、波佐見系古伊万里のくらわんか手である。8では復原口径14.0cm、器高2.7cm、高台外径8.3cmの大きさ。8の口縁部にかけて内彎して開く器形に比して、9は高台が外径4.4cmと小さく、体部が直線的に開く。8の乳白色がかかった白灰色の胎に比べ、9の胎は灰色味が強い。

10は復原口径9.0cm、器高1.7cmの大きさの皿で、底部は上げ底。外底部を除いて灰釉がかかる。胎は暗灰色、釉は濃い鉛色を呈する。

11は内底が一辺5cm前後の角皿で、高台は外径5.0cmで低い。淡黄褐色の胎で、淡い鉛色の釉がかかる。

陶器(12~15)

12・13は備前系擂鉢で、口縁部が肥厚して「く」字形に屈折する。内面に刻まれる目はシャープで、12は6ないし7本単位の目が刻まれ、13は7本単位の目が逆時計周りに移動しながら刻まれている。赤色粒を含む胎土で、赤褐色に焼成され、口縁部に鉄釉がかかる。



第26図 第7地点出土遺物実測図 (1/3)

14は口縁端部が丸く肥厚し、口縁下の外面に沈線と低い凸帯を巡らせる摺鉢。内外面ともに茶褐色の釉がかかる。内面には太く鈍い6本単位の目が、逆時計周りに移動しながら刻まれる。15は器壁の薄い摺鉢で、口縁部は緩く括れて内面に沈線と凹線を巡らせる。内面に刻まれる目はシャープで、6本以上の単位であろう。暗灰色の胎で、鉄釉がかかり暗赤褐色を呈する。

須恵質土器 (16)

胴部破片で、内面に格子目の叩(当て具か)痕がみられる。外面と内面の一部に鉄釉がかかる。

土師質土器 (17・18)

17は内彎する口縁部破片で、大甕の部類であろう。肥厚した口縁端部は上面が平らで、口縁下

の外面に浅い沈線が2条巡る。胎土に石英などの砂粒を含み、淡橙褐色に焼成される。18は鉢で、口縁部が僅かに「く」字形に屈曲して内傾するが全体の形は不明。精良な胎土で暗黄褐色に焼成されている。

小 結

出土遺物からは、くらわんか手の染付碗や皿などは18世紀後半から末頃、他の陶磁器でも19世紀代のもものとみられる。光雲軒午道（巍純）法印師による鈴熊寺復興の時期が文政六（1823）年春から天保二年までとされることを考慮すれば、該当する時期であり、中津藩主奥平昌高侯の指示による復興にかかる施設整備（本堂・庫裡などの再建、百段の石段、涅槃石、法華一字一石塔の整備など）と一連の事業で石垣の整備があった可能性が高い。矢羽根楔痕を残す石材は鈴熊山中隨所にみられ、涅槃石周辺をはじめ花崗岩巨石露頭にも矢羽根楔痕が残る。ただし、百段の石段を中央とした前面側の東側整備に比較すると、第6地点と第7地点の境にあたる南側の石垣の積み方は粗雑である。また瓦塚は缶詰空き缶を含むことから第二次大戦以降の台風災害時にかかる廃棄らしく、コンクリート製階段もこの頃を前後する時期のものであろうか。

8) 第8・9地点

第8地点（図版18、第27図）

鈴熊山の北西側の平坦面で、駐車場と大型遊具の設置予定地を調査した。このうち平成9年度に調査を実施した1・2トレンチが遊具設置予定部分であり、平成10年度には駐車場用地に3・4トレンチを設置して調査を実施した。

1・2トレンチは、山裾に近い水田の長軸に沿って長さ10.0m、幅2mの広さで設定した、東側が1トレンチ、西側が2トレンチである。表土の耕作土・床土の下に灰黄褐色ないし灰茶褐色の色調の堆積土があり、地表面から50～60cm下の黄褐色砂質粘性土層で数次に分けて面を精査したが、何らの遺構も発見できなかった。なお灰黄褐色・灰茶褐色の堆積土には陶磁器片・土師器片などが若干量含まれる。

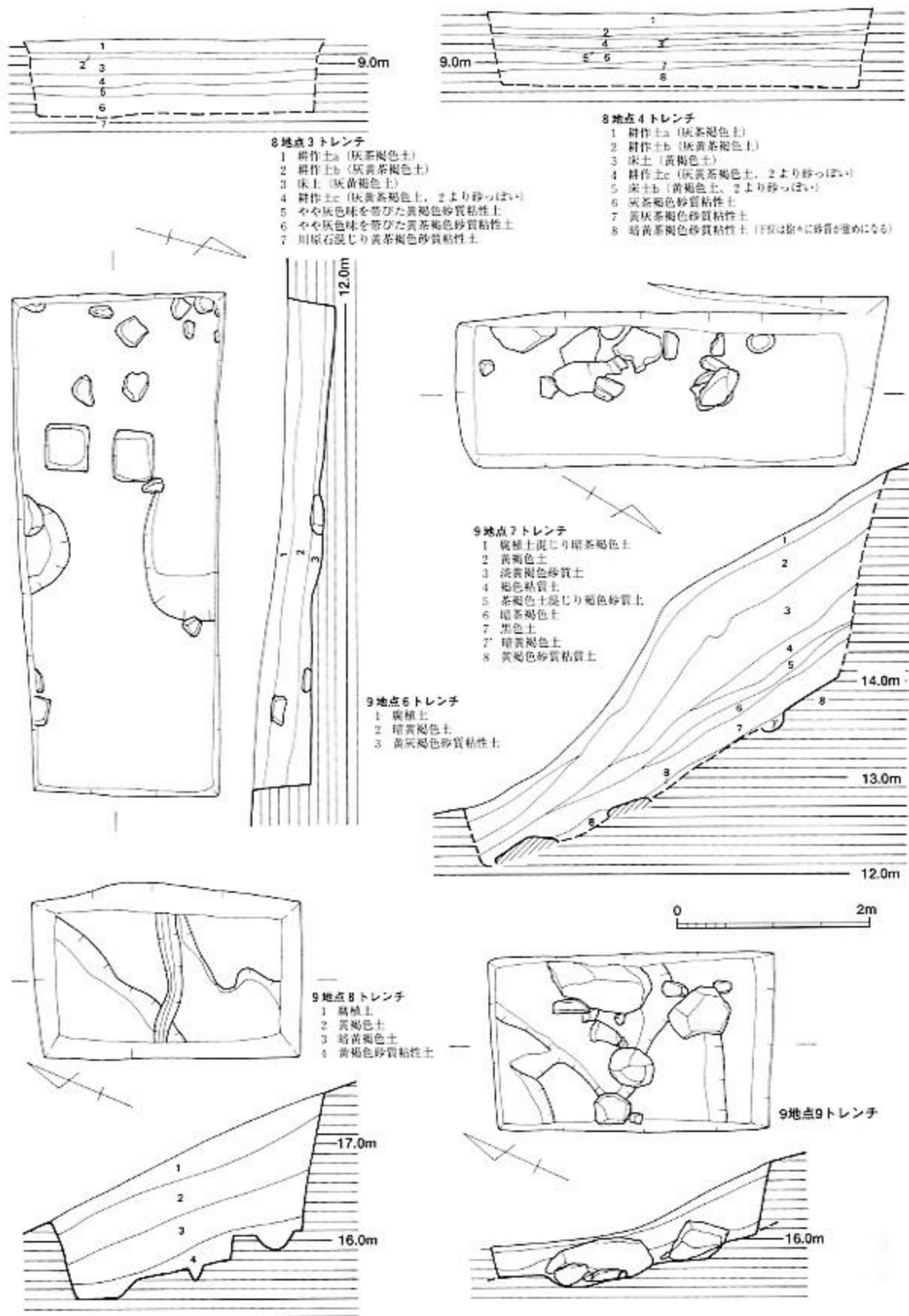
3・4トレンチは、1・2トレンチの西北西側に3.0m四方、南西側に3.0m×4.0mの広さにそれぞれ設定した。耕作土・床土の下には灰黄褐色ないし灰茶褐色の色調を呈する砂質粘性土が堆積し、4トレンチでは水田耕作土・床土が複数堆積し、水田面の嵩上げがみられた。ともに現地表面下60～80cm深さの黄褐色砂質粘性土の部分で数次に分けて面を精査して遺構検出したが、何らの遺構も発見されなかった。

出土土器（第28図）

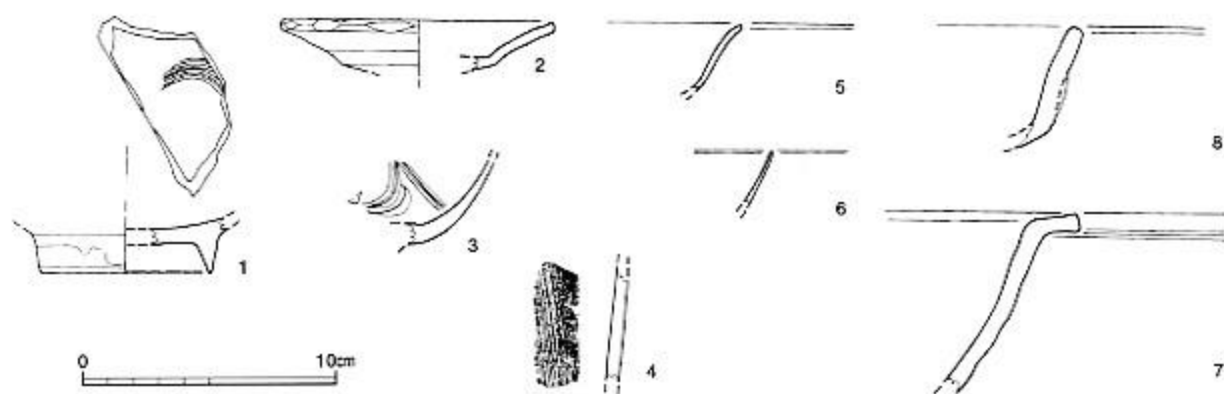
1～4は1トレンチ、5は2トレンチ、6は4トレンチから出土した土器類である。この他にも各トレンチから土師質土器片や、須恵器小破片、陶磁器小破片なども出土したが、図示に耐えない。

陶磁器（1～3・5・6）

1・5・6は白磁碗で、1の底部破片には高い高台が付き、内底面に櫛描きの曲線がみられる。



第27図 第8・9地点遺構・土層実測図 (1/60)



第28図 第8・9地点出土遺物実測図(1/3)

は緩やかに外反する口縁部破片で、露胎の口縁端部は面をもつ。6は小形碗らしい口縁部破片で、薄い器壁が直線的に立ち上がる。乳白色っぽい淡黄白色の胎で、釉は白灰色を呈する。

3は青磁碗の胴下半部の破片で、内面に花文が描かれ、厚めの釉がかかる。灰色の胎で、釉は緑灰色を呈する。龍泉窯系の青磁碗の破片であろう。

2は青磁皿で、輪花の口縁部破片。復原口径11.0cm、体部高2.1cmの大きさ。白灰黄色の胎で、淡灰黄緑色の釉がかかる。

土師質土器(4)

外面をナデ調整、内面を細かなハケ目で調整される鉢の胴部破片で、胎土に砂粒を含み、茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。

第9地点(図版19-1~4、第27図)

鈴熊山北側斜面で、駐車場から北側斜面を斜めに登り中腹の回遊園路に通じる園路予定地を調査した。5トレンチは山裾に長さ3.0m、幅2.0mの広さに設定した。花崗岩塊石を含む軟らかめの暗黄褐色砂質粘質土が厚く堆積し、近世陶磁器片を若干含む。6トレンチは山裾より一段上がった狭い平坦面に長さ5.0m、幅2.0mの広さに設定した。堆積土は薄めで、40~50cmの深さで岩盤質の面に達する。斜面下側になる北西側を中心に花崗岩塊石が散在するほか、浅い落込みがみられるものの、明確な遺構は発見されない。7トレンチは6トレンチ東側の斜面に長さ4.0m、幅1.5mの広さに設定した。西側の斜面山側には厚い堆積土がみられ、流出土の堆積土の下に斜面上側の掘削に伴うような複数土質の混在堆積が一部みられる。さらに下側には旧表土らしい黒色土が均質に堆積していて、花崗岩を含む花崗岩質風化礫面の上に乗る。8トレンチ・9トレンチは7トレンチ東の少し高い緩傾斜面に3.0m×1.5mと、3.0m×2.0mの広さに設定した。8トレンチでは階段状の削り出しと排水溝らしい人為掘削溝がみられたが、流出土の堆積が厚めである。9トレンチでは花崗岩の割石を含む塊石がまとまって発見された。

出土土器

7は7トレンチの旧表土より上層の堆積層から、8は8トレンチの地山直上から出土した。

瓦質土器(7)

丸く膨らむ体部から口縁部が強く外反する器形の土鍋で、端部は跳ね上がり状に上側に突出す

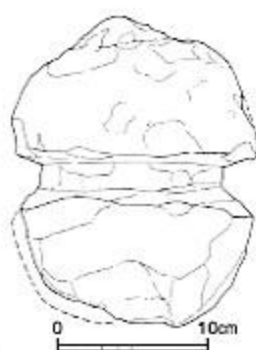
る。胎土に石英粒などの砂粒を含み、淡灰褐色に焼成され、外面に煤が付着する。

土師質土器（8）

土鍋で、底部から屈曲して立ち上がり、緩やかに外反する口縁部。内外面ともにナデ調整されるが、口縁部下に穿孔がみられる。胎土に砂粒を含み、茶褐色に焼成されるが、外面は煤が付着する。

出土石製品（図版19-5、第29図）

5トレンチの転落石と一緒に出土した。凝灰岩製の粗雑な造りで、部分的に数ヶ所欠損しているが長さ20.7cm、直径16.0cm前後の大きさで、断面形に幾らか歪みがある。五輪塔の空風輪で、空輪部分と風輪部分の境目は割り込まれて、直径12.0cmを測る。空輪の頂は上側からみて中央に見えるものの、側面からは傾いた位置になる。



第29図 出土石製品
実測図（1/5）

小 結

第8地点では、水田床土が複数面あり洪水への適応化とみられるが、地山にみている川原石を含む黄褐色砂質粘土層の上に堆積する層には13世紀頃の輸入陶磁器である龍泉窯系青磁片などを含み、13世紀代の鈴熊山西側平坦面の利用が想定される。

第9地点では、北側斜面であるため日常生活に直接関係しないのであろうが、斜面の掘削・盛土などの地業の痕跡があり、第7トレンチ出土土鍋片からみて中世以降であろう。五輪塔空風輪の時期は明確でないが、これも中世以降の可能性が高く、15・16世紀の戦国期に鈴熊山が陣構えにされる時期に関連するのかもしれない。

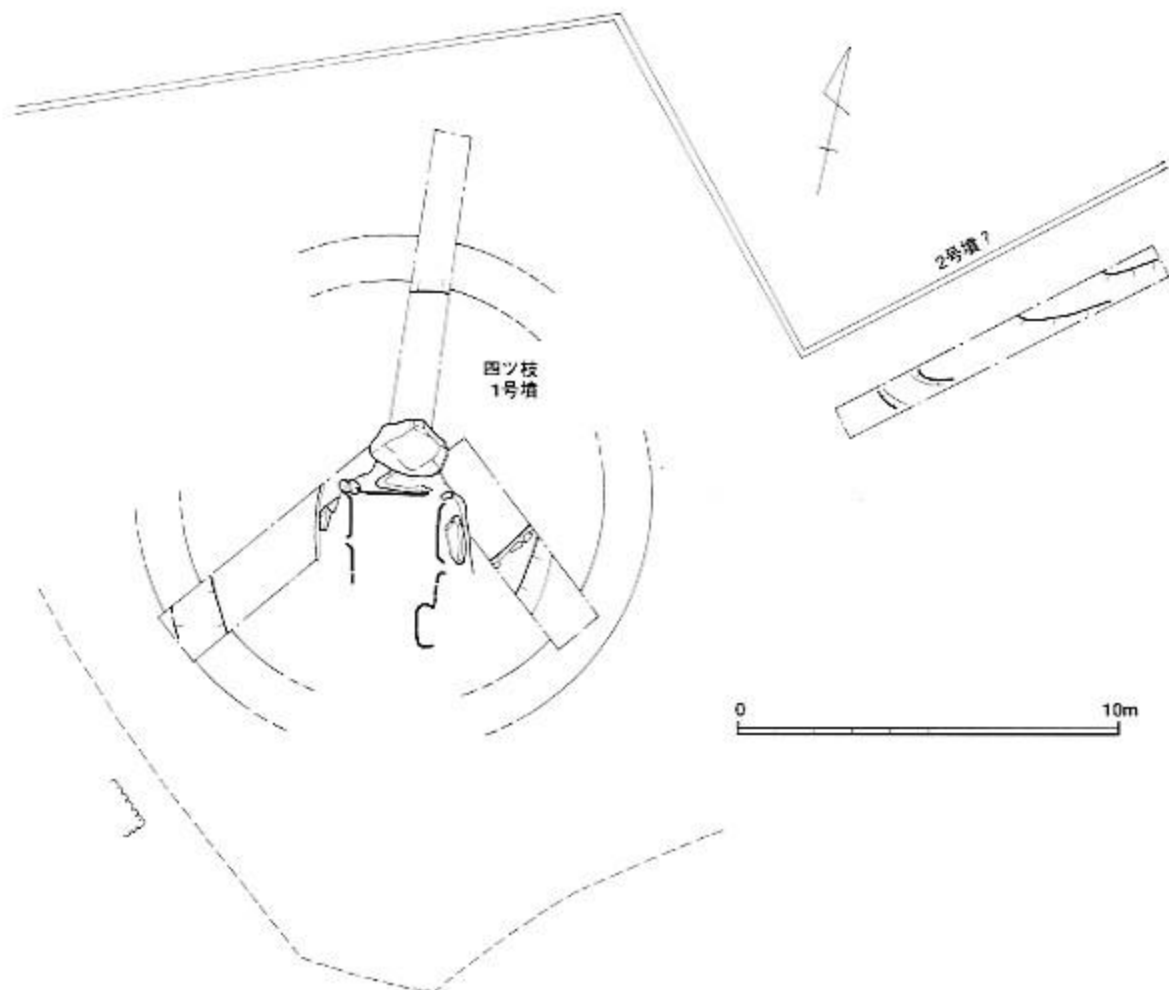
9) 第10地点

この調査対象地は標高10.6m弱の水田であり、中央部の水田面に露出した花崗岩の巨石を中心にY字形にトレンチを設定して調査を開始したところ、巨石の南側に破壊された石室の存在することが明確となり、仮に1号墳として石室のプラン確認と、周溝の存在の確認を目指した。また、昭和30年代にセメント製境界を設置した際に人骨が出土したという話から、境界石に近接した部分に長さ9.5m、幅1.0mのトレンチを設定して掘り下げ、遺構の有無の確認調査を行った。

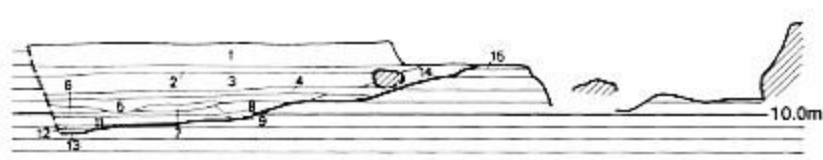
四ツ枝1号墳（図版20・21、第32図）

1号墳は、北側・西側のトレンチでに僅かに残る落込みを周溝とすれば、直径10m前後の規模を有する円墳であろう。東側のトレンチでは周溝の痕跡は残らず、水田床土が4次に互って形成され、最終面の床土が石室掘り方を覆うこと、その前の床土に列石を配置していることが分かる。おそらく古墳の墳丘を徐々に削りながら水田が整備され、水田区画の拡張一体化が進められたのであろう。

石室は、諸々の制約から全体を露呈させえなかったが、全長4.0m、玄室長2.6m、玄室幅2.0m、羨道長1.0m、幅1.0m前後?の規模の単室横穴式石室である。玄室部分の掘形は幅3.6mの規模で、

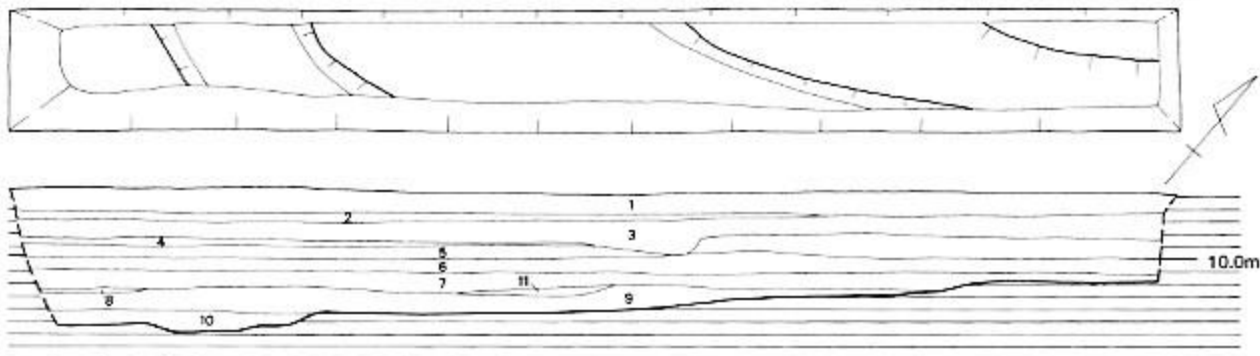


第30図 第10地点遺構配置図 (1/200)



1号墳東側トレンチ

- 1 耕作土a 2 床土a (赤褐色粘性土)
- 3 耕作土b (暗茶褐色粘性土)
- 4 床土b (やや明るめの赤褐色粘性土)
- 5 耕作土c (暗茶褐色粘性土)
- 6 床土c1 (やや明るめの赤褐色粘性土)
- 7 床土c2 (やや明るめの赤褐色粘性土)
- 8 床土c3 (耕作土bに近い暗茶褐色粘性土)
- 9 床土c4 (黄茶褐色粘性土)
- 10 耕作土d (暗灰茶褐色土)
- 11 耕作土d (マンガン多く含む暗灰茶褐色土)
- 12 床土d (黄褐色粘土) 12' (黄茶褐色粘土)
- 13 灰茶褐色土 14 明茶褐色土・褐色粘性土
- 15 明褐色ないし黄褐色粘土 (部分的にマンガン沈着)

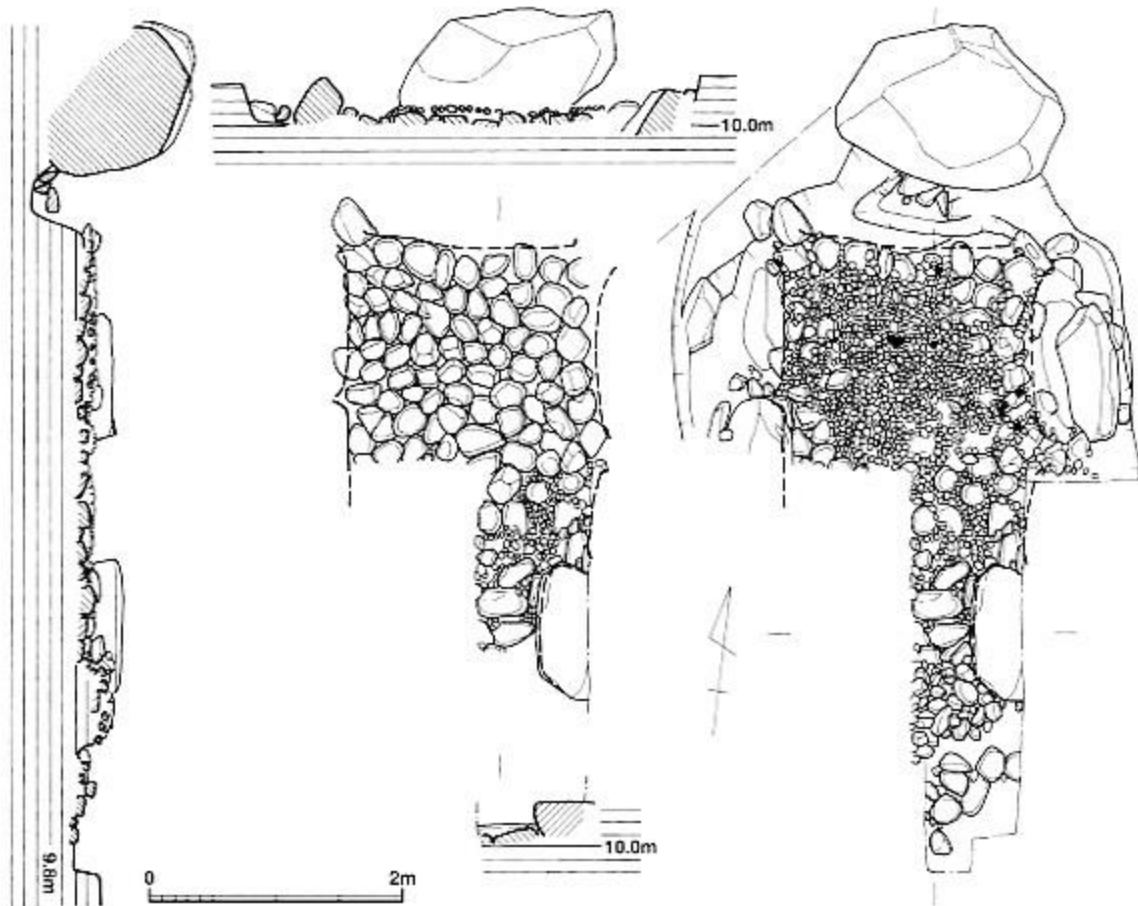


2号墳? トレンチ

- 1 耕作土a
- 2 床土a (赤褐色粘性土)
- 3 耕作土b (暗灰茶褐色土)
- 4 床土b (黄茶褐色粘性土)
- 5 耕作土c (3.2.0 やや濃い暗灰茶褐色土)
- 6 床土c (黄褐色粘性土)
- 7 黄褐色土混じり暗茶褐色土
- 8 黄褐色土混じり赤褐色土
- 9 暗茶褐色土
- 10 黒色土
- 11 明褐色ないし黄褐色粘土



第31図 第10地点トレンチ土層実測図 (1/60)



第32図 四ツ枝1号墳石室実測図 (1/60)

掘形内に石室を構築している。奥壁は既に掘り起こされて原位置を失ってはいるが、抜き痕から1枚石であることが明らかである。水田面に露出している巨石が本来据わっていたとみられるが、周囲を削られたのか抜き痕に比して幾分か小振りである。左右の側壁は各2枚の基底部石が据わることが明らかなものの右壁奥側の1枚は外側に倒され、左壁奥側の1枚は既に抜き取られて残らない。羨道部は左袖側を未調査ながら、右袖側は基底部に長さ1.0m規模の1枚石が用いられ、墓道側には側壁石が続かない。袖石間の床面には、やや細長く厚みのある川原石を敷いて仕切り石にしているが、袖石前面側端の羨門部に閉塞石が積まれている。

床面には扁平な川原石が敷き詰められ、更に玄室中央部を中心に川原石敷石の上に玉砂利が敷き詰められている。

石室を破壊した際の攪乱は敷石直上にまで及び、奥壁付近では玉砂利も乱れるが、玉砂利の面では須恵器破片や鉄製品片が若干出土し、玉砂利を外して扁平石の面を露呈させる段階で玉類・金属製装身具類が出土した。

出土土器類 (第33・34図)

須恵器片、土師器片、瓦質土器片、土師質土器片などが、石室部分の堆積土に混じって出土したが、敷石間に挟まるなど原位置を示すような出土例は極めて少ない。

石室内出土須恵器

1～3は高杯あるいは高杯の可能性があるので、1・2は口縁部と体部の破片である。1は復原口径12.0cmの大きさで、短く立ち上がり端部が僅かに外反する。2はやや深めの体部となるが、内底面に灰かぶりの釉が付着する。3は脚裾部と柱状部が接合しないものの同一個体の可能性がある。杯部は復原口径11.4cm、杯部高4.6cmの大きさで、杯底部と体部の境目と体部中程に箍状の突帯を設けている。柱状部は細めで、三ヶ所に透かし窓が空き、復原脚裾部径11.0cmの裾部に喇叭状に開く模様である。

4は壺の短く立ち上る口縁部破片で、端部は肥厚して内面側に摘み出したような形状をなして、上面が平らに整えられる。内外面ともに回転ナデ調整され、口縁部上面と胴部外面には灰かぶりの自然釉がかかる。

5～12は甕であろう。5・6・12は外面に格子目叩き痕、内面に同心円当て具痕のみられる胴部破片で、5は青灰色に堅く焼成されるが6・12は淡灰色の軟らかな焼成である。7～11は外面に平行叩き痕、内面に同心円当て具痕のみられる胴部破片。7・8・11の外面にはカキ目調整が加わり、7・11の内面には部分的にナデ消しがみられる。また7・8・11は堅く焼成されるが、7・11の外面に灰かぶりの自然釉が付着する。

石室内出土土師器

12は閉塞石に挟まって出土した高杯の脚台部破片で、杯部や脚裾部の形状は不明。柱状部に絞り痕が残る。胎土に赤褐色粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成される。

石室上部出土埴輪

14は片面に平行沈線の文様、片面に箍状の貼付凸帯のみられる形象埴輪の破片だが、本来の形状やどの部位かは不明。凸帯の断面は丸く、調整はやや雑である。胎土に角閃石・砂粒を含み、赤茶褐色に焼成される。

石室上部出土陶磁器

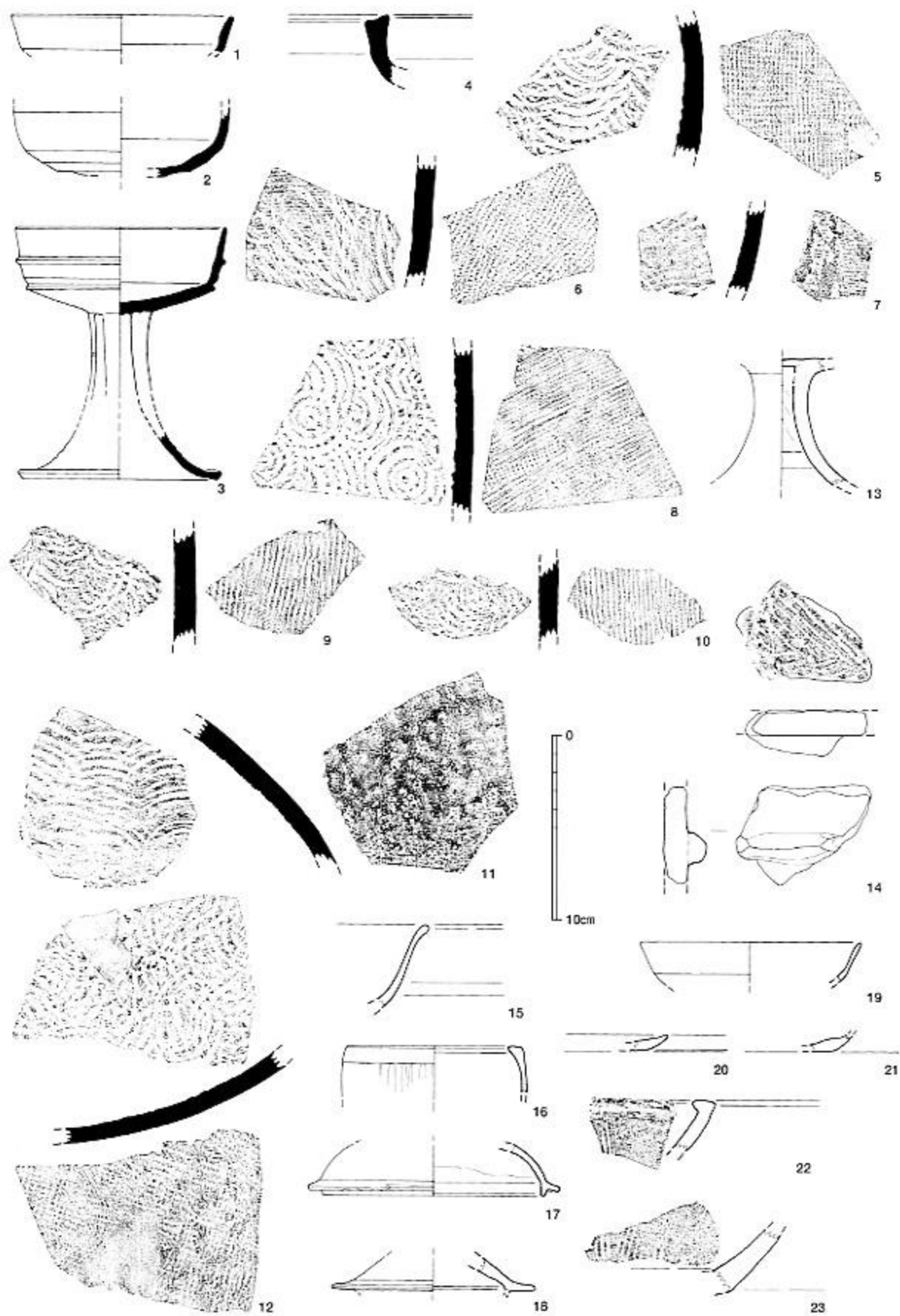
15は龍泉窯系の青磁碗口縁部破片で、やや厚めに釉がかかる。小形碗の類であろう。16は白磁香炉の口縁部破片。端部は内側に肥厚して、上面が平らに整えられる。外面に片彫りがみられる。17は磁器蓋の端部破片で、身受けのかえりをもつ。身受けの部分は露胎で、胎は淡灰白色。他の部分には透明感のある灰色の灰釉がかかる。18は陶器蓋の口縁部破片で、身受けのかえりは短い。内面は露胎で明褐色を呈するが、外面には茶褐色の鉄釉がかかる。

石室上部出土土師器・瓦質土器

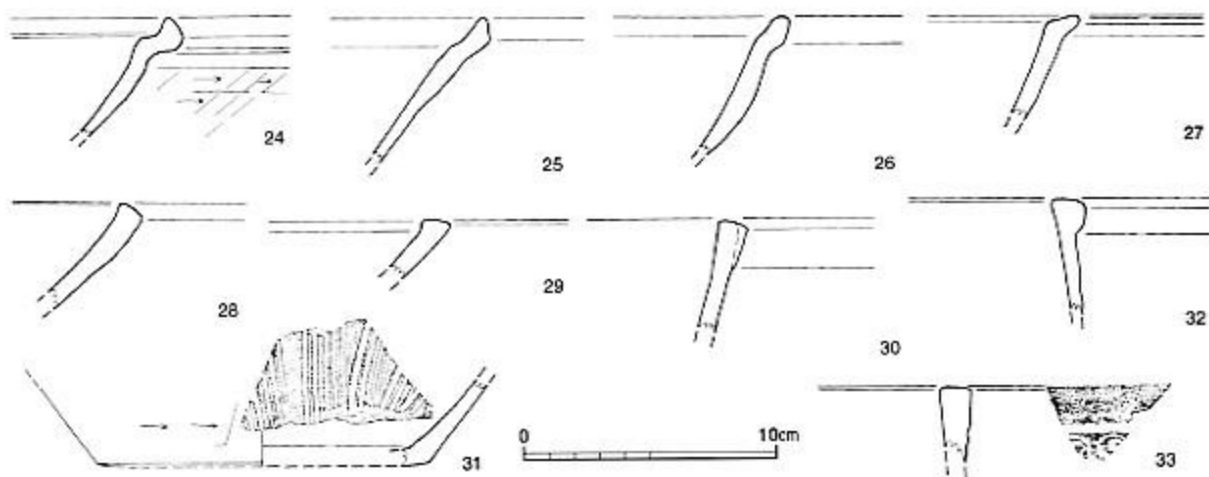
19は土師器杯で、復原口径12.0cmの大きさの小形杯で、器高は3.0cm前後であろう。精良な胎土で淡明褐色に焼成される。20・21はともに糸切り底の土師器小皿で、口径10.0cm強、器高1.0cm前後であろう。

22・23・31は土師質插鉢である。22は片口部に近い口縁部破片で、端部は内側に突出するように肥厚する。23・31は底部破片だが、器壁で23の厚みに比して31は薄い。目はややシャープで、7本あるいは5本前後単位で刻まれる。

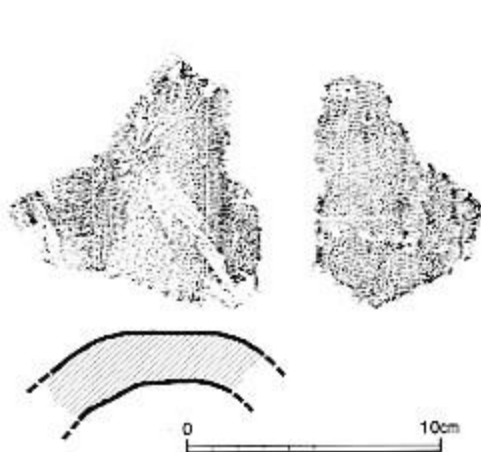
24・27は瓦質插鉢で、24は口縁部が短く外反して端部が上側に摘み上げられた形状をなすが、27



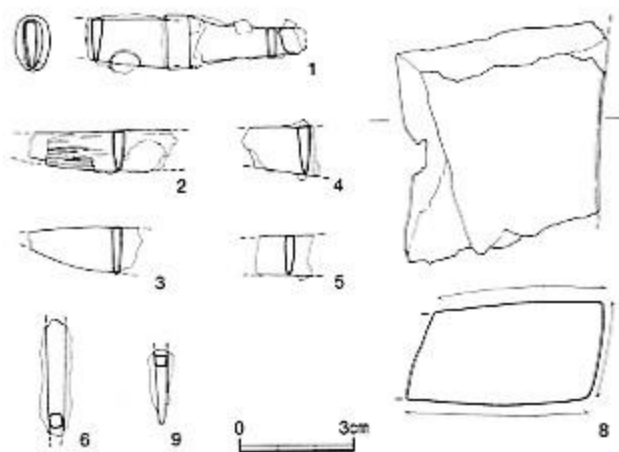
第33图 1号墳出土土器実測图 1 (1/3)



第34図 1号墳出土土器実測図2 (1/3)



第35図 1号墳出土瓦実測図 (1/3)



第36図 1号墳出土鉄製品・石製品実測図 (1/2)

は短く外反し端部上面が平らに整えられる。胎土は24が精良で、27は角閃石などの細砂粒を含み土師質に近い。ともに外面に煤が付着する。

25・26・28～30は土師質土鍋である。25・26は口縁部が短く外反して端部が上側に摘み上げられた形状をなすが、屈曲はやや緩やかである。28・29は肥厚気味に伸びた口縁部が端部で内面側に突出するタイプで、30は口縁部外面に折畳んだように肥厚するタイプである。28・30は瓦質に近く精良な胎土で、29は胎土に砂粒を含む。30は外面に煤が付着する。

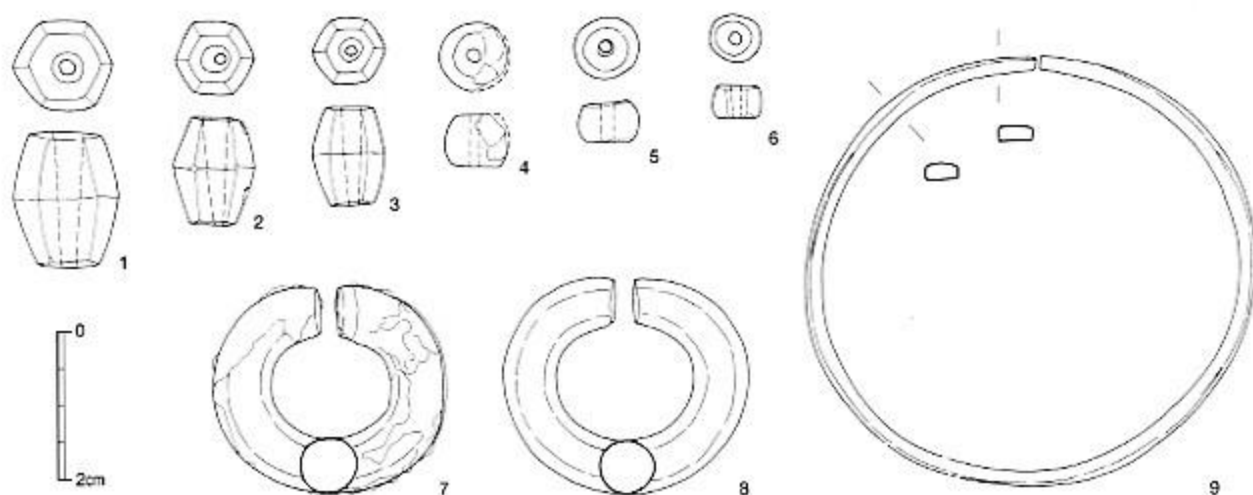
32・33は瓦質火鉢であろう。32は内傾気味の口縁部で、端部外面が丸く肥厚する。33の口縁部は直線的に立ち上って上面は平らに整えられる。外面に籐状の貼付凸帯が巡り、巴文の押捺文様が並ぶ。

瓦 (第35図)

内面に紐を伴った布目痕を残す丸瓦片で、外面には磨滅するものの篋削り痕が残る。

鉄製品 (図版22-3、第36図)

1～5は刀子。いずれも欠損品で全体の形状は不明。1は基部端と先端側を欠き、残存長5.6cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmの大きさで、関部に外径1.5cm×1.0cmの木質が遺存する。2～5は先端側とみ



第37図 1号墳出土装身具類実測図 (1/1)

られる破片で2には木質が鏽着する。6・7は鉄鍍で、残存長2.0cmと、3.0cmの基部側の破片。

石製品 (図版22-3、第36図8)

玄室床面よりやや浮いて出土した凝灰岩質砂岩製の仕上砥石である。厚さ2.7cmの板状をなす破片で、現存長6.2cm、現存幅5.5cmの大きさ。表裏両面が砥面に使用されているが、片側面と、最終破損面にも使用の痕跡が一部みられる。

装身具類 (図版22-3、第37図)

玉類では、水晶製の切子玉3点(1~3)と、ガラス製丸玉3点(4~6)の2種類がある。水晶製切子玉は長さ13.3~17.7mm、外径9.5~13.7mmの大きさ。ガラス製丸玉は厚さ4.5~7.0mm、外径6.1~8.7mmの大きさで、コバルトブルーを呈する4・5に比してライトブルーを呈する6はやや小振りである。

7・8は耳環で、ともに錆化が進むが、銅地銀張りの例1点(7)と、青銅地の例1点(8)がある。前者は径7.2×7.4mmの丸棒を長径31.0mm、短径27.3mmの大きさの環に、後者は直径6.9mmの丸棒を長径32.5mm、短径28.8mmの大きさの環にしている。

9は青銅製の釦で、劣化が進み表面が剥落しているが、幅4.3~4.6mm、厚さ2.2~2.4mmの蒲鉾型断面の扁平な板を外径59.3×57.0mmの大きさの環にしたもので、環は完全に繋がずに端部で接する形態をとる。なお端部は他の部分より断面形がより扁平である。

2号墳?

1号墳の約10m東側に設定したトレンチでは、1号墳東側トレンチの堆積と比較してみると、標高10.0m前後の水田床土が厚めで、更に下側の床土は複数の土質が混ざって厚めに形成されている。その下層には暗茶褐色土が堆積して、明黄褐色の地山との間に黒色土の堆積する溝状遺構を挟む。この溝状遺構は幅1.2m、深さ0.15m規模であるが、弧を描き、弧の同心円の位置に削り出し状の段がみられる。部分的なトレンチで断定はし難いものの、1号墳墳丘を避けて廻る通路であったのか、あるいは1号墳以外の古墳墳丘が存在した可能性がある。

この黒色土部分からは埴輪片が出土し、暗茶褐色土の上面で須恵器片が若干出土した。



第38図 2号墳？出土遺物実測図（1/3）

土器類（第38図）

1・2は須恵器甕である。1は外面に格子目叩き痕、内面に同心円当て具痕のみられる胴部破片で、内面にカキ目状の部分的なナデ消しが加わり、外面にヘラ文様？がみられる。1号墳石室部分から出土した須恵器甕（第33図6・12）と調整、焼成ともに酷似し、同一個体の可能性がある。2は外面が平行叩きの後にカキ目調整され、内面に同心円当て具痕のみられる胴部破片で、やや堅い焼成。

3は円筒埴輪の破片らしいが、外面に高めの凸帯が巡る。直径は20.0cm前後の細めのようなのだが、破片の上側は開き気味である。内外面ともにヨコナデらしい調整痕がみられるものの、ハケ目は分からない。胎土に角閃石・石英などの細砂粒を含む。

小 結

これらの土器類では、須恵器高杯はシャープな突起をもつことからみて6世紀中頃～後半頃のものと思われる。土師器高杯や、形象埴輪の存在からみても時期的な問題はないであろう。一方、青磁碗や白磁香炉などは13世紀代のものであり、土師器小皿や土鍋類も13世紀まで遡るタイプが含まれ、陶器蓋や瓦質火鉢、土鍋などにはさらに時期的に下降する要素がある。

この調査区は水田であるため、巨石が横穴式石室墳であると想定していなかったが、調査の結果、水田開削の歴史とともに水田下に埋没していたことが判明した。時期的には須恵器からみて6世紀後半のもので、石室構造から時期的に新しくみることも出来るが、6世紀代を下ることはない。石室床面に残された銅釧や玉類の時期も妥当な時期であろう。玉砂利を敷く石室で、羨道が短い石室ではあるが、玄室の平面形が長方形であることが古式の特徴を残し、過渡期の様相を有していると言えよう。（小池）

IV. おわりに

鈴熊山中での最古の人の痕跡は打製石斧であり、弥生時代前期のものであろう。しかし、豊前北部の京都郡では低丘陵上でごくふつうに発見される予想される弥生時代の集落は存在しない。古墳時代には後期古墳が丘陵の随所に造営されたいが、その痕跡はほとんど残っていない。この調査でかつて存在した古墳の痕跡が確認されたことは一つの成果といえる。

8世紀代の遺物として須恵器皿・土師器甕が検出されたが、顕著な遺構を確認できなかった。行

基開基の伝説はもとより信頼に値するものではないが、土器が出土した以上は何らかの利用がなされたものであろう。平地に位置する低独立丘陵という地勢を考えれば至極当然のことである。

今回の調査で得られた資料の中、内容的に充実するのは13世紀後半～14世紀にかけての遺物群であり、瓦の一部もその時期に比定される。その当時の当地の歴史について記録は乏しい。

『角川日本地名大辞典 40 福岡県』1991では12～13世紀のこととして以下のように記される。吉富郷（佐井川以東一帯の古称）では建保4（1216）年宇佐宮社家4姓の1つ田部氏が地頭職を得、寛元元（1243）年に田部氏子息の大神俊綱に譲与されたが、貞永元（1232）年に大友氏の重臣一万田氏の祖大和太郎兵衛尉時景が地頭代となり、建治3（1277）年には西郷公信が地頭代となって実権を振るった。しかしこの間、宇都宮氏の一族山田氏（現権田町内の山田荘を本拠とする）が次第に吉富郷各地を押領していった。吉富郷内節丸（大字広津の小字）は宇佐宮神領であったが、元弘3（1333）年宇佐大宮司公連が宇佐の大楽寺に節丸名15町を寄進した（1903頁）

また、この鈴熊山に近い広津城・天仲寺山城に関して、

広津城は「豊前古城記」によれば、天慶年間（938～47）に源経基が豊前国守護職を得て下向したときに築造され、藏人行家が居城し、その後、数代して建久6（1195）年宇都宮氏の攻撃で落城、以後宇都宮氏が居城していた。天正15（1587）年頃、広津治部少輔鎮忠・弘種のとき黒田如水の軍勢のために開城したという。しかし、「吉富町誌」は、室町期足利尊氏より豊前守護職に補任された宇都宮氏6代守綱の子房政が築いたともいう。

天仲寺山城は宇佐宮社家田部系広津氏の築城になるもので、その一族は大友親世にくみして、文明年間（1469～87）豊後国玖珠郡に領地を得て恵良氏を称したという（1903頁）。

参考までに、記録に現れる鈴熊寺について、同書から引用する。

すずくま 鈴隈（743～744頁）

〔中世〕室町期にみえる地名。豊前国上毛郡のうち。応永32（1426）年7月少武満貞と菊池兼朝が連合して大内氏に対し兵を挙げた。これに対し豊前国守護大内盛見は九州に出兵、「到津家譜」応永32年9月2日条（大友資料10）には、「豊後、筑前所々にニ逆徒等蜂起ニヨッテ、御屋形（大内盛見）大先上毛郡鈴隈ニ御下着」と見える。同日、宇佐大宮司公兼は鈴隈に神馬1疋を寄進して参向し、「九州静謐之時」には宇佐宮への参宮を請うている。この時大内盛見は鈴隈寺に入ったと思われる。鈴隈寺は山号を金華山といい天平年間に行基開山と伝える。なお、応永30年12月15日の宇佐宮司御造営并神事法会再興日記目録（到津文書/大分県史料30）によれば鈴隈より神馬を宇佐宮に進めている。大内盛見は翌年の応永33年1月28日に宇佐宮に入り安門坊を宿坊としているので、その頃も鈴隈に陣を構えたことになる。応仁の乱で西軍の大内政弘が京都にいるすきに、少武氏は東軍に応じて筑前の回復をはかり、文明元年からは大友親繁も加わって筑前・豊前を中心に戦が続いた。この戦いは文明10（1479）年少武政資の敗北で終わったが、文明10年10月9（正任記/大日本史料8-10）には「両国御祝言」のため鈴隈寺彈正少弼武治の使、波多野出雲藏人が参上したことが見える。これ以後、博多は大内氏によって支配されることとなる。鈴隈寺は寺田をもち、天文24（1556）年2月19日の坪付注文（緒方文書/大友資料20）によれば有久名の鈴隈寺領田地3反

について反鏡80文・定米4斗5升・天料反別40文、また畠地は地子を夏秋に1斗4升6合それぞれ納めていた。天正6（1579）年大友義統が6万の兵を率いて日向の土持親成を破った時、麦生鑑光への書状（大友家文書録/大友資料24）に「聊不可有油断之趣、鈴隈寺江申含候」と見え、鈴隈寺の僧が義統の使僧として随伴していたことが知られる。（飛野）

四ツ枝1号墳の発見から後期古墳の横穴式石室に目を向ければ、岡為造氏収集考古資料集に収録された「築上史料」の抜粋では、「鈴熊山ノ古墳」として以下のように記述されている。

「鈴熊山ノ南登口（1）右方ニ石葎ノ上ニ封土迄アリ羨門ガ南ニ開イタ雄大ナ一古墳ガアツタガ、明治二十八年頃直江佐井川堤防築造ノ際破壊サレテシマッタ。大澤亀太郎ノ話ニ、自分ノ養祖父ガ此処ニアツタ松ノ切株ヲ掘ッテ居タ所石ノ戸ニ掘リアテタノテ取除イテ見ルト、中ハ室ニナツテ居リ下ヨリ曲玉数個、鏡一面掘出シタトノ事デアツタト。文政七年鑄造鈴熊寺半鐘ノ銘ニ「茲有一奇於南溪鑿土碎岩而以欲為佛地時焉採得于土中曲玉及金鏡之古矣云々」トアルモ此ノ古墳ヲ指シタモノデアラウ。山頂（2）不動明王及修業大師石像ノ台石ニ用ヒテ居ルモノハ此処ニアツタ古墳石葎ノ一部デ、此ノ石葎ノアツタ所ヨリハ且テ紺色ノ小玉一個ヲ発見シタルコトモアル。次ニ寺ノ東方（3）一段低キ所ノ平地ニモ古墳ガアリ、別冊北東部又鈴木文吾宅裏（5）ニモアリ、鈴木宅前南北ニ通スル道路ノ東方（6）田中ニモ石葎ノ一部残レル古墳ノアトガアル。鈴木宅裏ノモノヨリハ（昭和7年4月17日）無耳提瓶一個ヲ発見シ目下全氏宅ニ保存シテアリ。別冊北東部」

これによると、岡為造氏の段階で、鈴熊山には少なくとも6基の古墳の存在が記されている。現在では明確な位置は分からないが、(1)は今回調査の第1地点そのものである。勾玉数個や鏡が出土したとされるが、鏡が伴ったとすれば6世紀後半より先行する時期を考える必要も出てくる。(2)は第6地点に該当するが、地形的には鈴熊山頂に近い部分に別の古墳があってもおかしくない地形である。また寺の東方一段下がった処は第4・第5地点ではなさそうで、第3地点付近を含めた緩傾斜地が考えられる。参道南側の家屋部分では確認し得えていないが、種子池は石段下から約50m東側の町道との角にある池であろうから山裾にあったことになる。また(5)の鈴木宅は第3図地形図に示す第4-C地点の約50m東側に位置する建物であり、この家屋の裏側とすれば山塊裾部の等高線の膨らみか、整地部分に隠れていることになる。(6)が鈴木宅前の南北に通じる道路の東側とあるが、道路が鈴木宅前の細い道なのか少し先の町道なのか、東北方の旧諏訪神社が何処なのかは明確でない。

第10地点で発見した古墳は、あるいは(6)の古墳であるのかも知れないが、現状では不明であり、昭和51年発行の福岡県遺跡等分布地図にも記載のない古墳であることから、大字小字を組み合わせ「鈴熊四ツ枝1号墳」と呼称することにし、そのまま埋め戻して現地に残すことにした。また北東側のトレンチの状況から隣接地に別の古墳の存在する可能性が高く、2号墳の存在を想定しておきたい。（小池）